

日韓の受動文における対照研究

—「言う／話す／聞く(訊く)」を中心に—

鄭 在喜

要 旨

本研究は、対訳本を用い、同じ文脈、同じ場面、同じ状況の中で、韓国語は能動文で表されている用例に対し、日本語は受動文で表されている用例を取り上げ、対照及び分析したものである。特に、韓国語の「言う／話す／聞く(訊く)」といった動詞が、日本語ではほとんど「言われる」という受動文で表されているのに注目し、なぜ同じ文脈、同じ場面、同じ状況なのに異なる文構成になるのかに対する考察を試みた。その結果、日本語の「言われる」受動文は、動作を受ける客体が動作の影響を受けて何らかの感情の変化をもたらし、そして、その感情の中には被害や迷惑の意味を表す場合に多く用いられることが分かった。なお、その際には視点が移動し、受動文となるため、韓国語とは異なる構文になると考えられる。

【キーワード】受動文、 言う、 話す、 聞く、 言われる、 視点

1. はじめに

韓国人にとって日本語は他の外国語に比べて学びやすい言語であると思われる。実際、韓国語と日本語は同じ漢字文化圏に属しており、語順もSOVと同じで、助詞と敬語が発達しているところなど、多くの類似点を持っている。両言語の文構造の類似性を次の例で見よう。

(1) 警察が(S) 泥棒を(O) 捕まえた(V)。

(2) 경찰이(S) 도둑을(O) 붙잡았다(V).

(訳：警察が泥棒を捕まえた)

(3) 一郎が(S) 太郎を(O) 殴った(V)。

(4) 이치로가(S) 타로를(O) 때렸다(V)

(訳：一郎が太郎を殴った)

(許(2004)例文参照)

上記の四つの例文は語順や述語の構造においてほぼ同一の構造である。これは動詞述語文だけでなく、形容詞や名詞述語文も同様である。このような両言語の類似性は学習方法や教授法にもかなりの影響を与え、現在も韓国で行われている日本語教育は韓国語と平行的に対照する、いわゆる文法直訳法がかなりの部分を占めている。

しかし、二つの言語は類似してはいるものの、同じではない。日本語の受動文がその代表的な例であろう。その例として、上に挙げた四つの例文をそ

れぞれ受動文に変えてみよう。

(1)' 泥棒が 警察に 捕まえられた。

(2)' 도둑이 경찰한테 붙잡혔다.

(訳：泥棒が警察に捕まえられた)

(3)' 太郎が 一郎に 殴られた。

(4)' 타로가 이치로한테 맞았다.

(訳：太郎が一郎に殴られた)

ここで注目すべきことは(1)' (2)' は両言語共に受動文で表すことが可能であり、それぞれ対応する能動文が存在する。その一方、(3)' (4)' は、それぞれの能動文は同じ事柄を表しているが、日本語の「殴られた」は受動文、韓国語の「맞았다(殴られた)」は対訳では受動文に訳しているが、韓国語としては能動文に当たる。

(3)' (4)' のような現象について安増煥(1999)は、両言語の受動形態生産性の差異に起因するとしている。安(1999)によると、受動形態の生産性とは、受動形態(被動形態)が接続し、受動詞(被動詞)を作り出す動詞の量のことである。韓国語は他動詞に限り受動文が作れるのに対し、日本語の場合は他動詞と自動詞をも受動文にできるため、非常に高い生産性をもっていると言える。こうした生産性の差異は日本語の受動文を韓国語の受動文に表現する際、多くの制約を与え、文法直訳法による日本語学習に慣れている韓国人学習者を戸惑わせるのである。

よって、本研究では両言語の受動文がどのように異なるかを、日本でも人気ドラマであった「冬のソナタ」の対訳本を用い、同じ文脈、同じ場面、同じ状況という同一視点から対照・分析を行った。そして、その結果、韓国語の「言う／話す／聞く(訊く)」といった動詞が、日本語ではほとんど「言われる」という受動文で表されている用例に注目し、本稿では、なぜ同じ文脈、同じ場面、同じ状況なのに異なる文構成になるのかに対する考察をまとめる。

なお、本研究での分析は「冬のソナタ」の対訳本に基づいての分析にすぎず、一つのケーススタディとしての分析であることを予め断っておく。

2. 先行研究

日本語と韓国語の受動文に関する先行研究は数多くなされている。本研究では、その中でも両言語の受動文を分析及び対照をする際に枠組みとなる受動文として認められる受動範囲に関する先行研究をまとめる。

2.1 本研究における日本語の受動構文の容認条件

日本語の受動研究は主に構文と意味を扱う研究がなされている。それは、ほとんどの動詞に「-(ら)れる」を接続できるため、多様な構文と意味を生成することができるからである。

寺村(1982)では、ある表現が受動文として認められるためには、述語動詞が「-(ら)れる」の受動の形でなければならないこと、そして、形態的な条件だけでは充分ではないとし、その統語構造の成分間には意味的な体系が認定されなければならないと述べている。これらをまとめると次のような条件が必要であると考えられる。

- ① 述語動詞の語幹に「-(ら)れる」という受動の形態を備えなければならない。
- ② 対応する能動文が存在し、能動文の動作・作用の対象である対格補語が受動文では文法的である主語として表れるという統語的な特徴を用いる。
- ③ 外部から何らかの動作・作用を受ける対象を主語とし、事態を説明するという意味的な条件を満たさなければならない。

本研究では、寺村に倣い、日本語の受動構文を認めることにすし、以下、「受動文」と記する。

2.2 本研究における韓国語の受動構文の容認条件

韓国語の受動文／表現／態が持っている伝統的な概念は、崔鉉培(1983: 420)の「움직씨의 몸에 붙어서, 다른 것으로부터 그 움직임을 입을 보이는 것[訳: 用言に接続して他からその動きを受けたことを表すこと]」で定義される。つまり、ある動作が主語である人や事物の力で行われるのではなく、他の力により行われる状況を表したものである。

韓国語における受動研究は主に形態論的立場からの研究と、統語論的立場からの研究が大半を占めている。その中でも受動形態の認定範囲や、受動形態の文法的な適格性に関する形態論についての研究が主に行われてきた。その理由は、受動の意味を表す形態をどこまで認めるかという問題が受動文の研究において重要な課題であったためである。

一般的に韓国語の受動は能動と対立して態を表現するものと理解されており、主に述語の形態について議論されている。つまり、韓国語の受動形式は「動詞の受動形」及び「受動的な意味をもつ語彙」によって表現される多様性をもつ。詳しくは以下のようである。

「動詞の受動形」

→派生的受動接尾辞

「- 이(i) - · 히(hi) - · - 리(li) - · - 기(gi) - 類接辞」(以下、「이(i)類接辞」)受動

「受動的な意味をもつ語彙」

→構文的受動表現である補助動詞形態

「- 아·어 지다(-になる)」

・語彙的受動表現である接尾辞形態

「- 되다(なる)」、「- 받다(受ける)」、

「- 당하다(される)」

・受動の意味をもつ語彙

「맞다(殴られる)」、「속다(騙される)」、「혼나다(怒られる)」など

「이(i)類接辞」による受動は、韓国語の受動において最も典型的な受動である(「真被動文¹⁾」ともいう)と言われている。しかし、「이(i)類接辞」による受動の中には、外形的には「이(i)類接辞」の形態をとっているが、対応する能動文や行為の主語がない場合もあり、受動と見なすには問題になる場合もある。また、述語動詞に関する様々な制約によって接

続できない動詞が多く、生産性が低い。そのため、韓国語では上述のように多様な受動形態が存在すると考えられる。

韓国語ではこのように多様な受動形態が存在するため、どこまでを受動文、或いは受動表現と認めるのかに関して様々な議論が行われているが、서정수(1996)『국어문법』(国語文法)では、韓国語の真被動文がもつ構文・形態論的特性について以下の三つの制約を挙げている。

- ① 能動文 ⇔ 被動文の対応制約
- ② 被動形態の制約
- ③ 同一意味の制約

①は、ある文を被動文と見なすためにはそれに対応する能動文が存在しなければならないということである。②は、被動文と見なすための形態的な制約であるが、上述した派生的受動接尾辞「이(i)類接辞」のことであり、形態的にこの四つの接尾辞を備えなければならないということである。③は、ある能動文を被動文に変えた際、その二つの文は同一意味でなければならないという制約である。本研究では、서(1996)に倣い、上記の三つの制約を満たしている文を「受動文」と見なすことにする。そして受動的な意味をもつ語彙を「受動表現」とし、韓国語においては「受動文」と「受動表現」の二分類に分けて考察する。それは、上述とおり「이(i)類接辞」による受動は様々な制約によってその生産性が低いため、それだけでは日本語の受動文との対照にならないためである。また、ある事態が文法的ヴォイスで表現されるか、語彙的ヴォイスで表現されるかは言語によって異なり、ある事態を言語化する際、話し手は「受動形態(文法的ヴォイス)を使おう」という動機ではなく、「ある事態を表現しよう」という動機によって受動文及び受動表現を選択し発するわけであるため、受動的な意味をもつ語彙も受動表現として対照の対象とする。

3. 研究課題及び分析方法

先行研究にもテレビドラマを用いた両言語の受動文の対照研究を行ったものがある。許(2004)では、両言語の受動文を形態的・構文的・意味的にそれぞれ分析し、同一の基準で対照分析を行っている。そして、話し言葉における日・韓両言語の受動の特徴

では両国のテレビドラマを分析しているが、日本のドラマ「ひまわり」と韓国のドラマ「모래시계(mol esigye)」を取り上げ、それぞれ受動文が使われている場面を調べ、受動文の使用率、及びその構文的特徴、意味的特徴などを分析している。しかし、許では「ひまわり」と「모래시계」から見られた受動文を、同一の場面で両言語にどのような違いが見られるのかについては考察していない。

また、許(2005)では日本語の「言われる」受身文の使い方について研究されている。この研究では「言われる」受身文の構文的・意味的・語用的特徴を分析しており、発話内容が直接的に聞き手に向けられ、それによって聞き手が何らかの感情を持つようになったことを表す際、日本語は「言われる」という受動文を用い、動作を受ける客体が動作の影響を受けて何らかの感情の変化をもたらしたことを表す場合が多いと述べられている。しかし、ある言語がどのような場合に日本語の「言われる」と対応するのかを調べるには、両言語が「言う」(能動)―「言う」(能動)で対応する場合も考察する必要があると思われる。

次に、本研究で注目している韓国語の「言う／話す／聞く(訊く)」といった動詞が、日本語ではほとんど「言われる」で表されていることと関連して、安善柱(2007)では日本語の話をサレル側である「聞く」と「言われる」の使い分けを論じているが、話題内容が皆の関心事(客観的な話題)である場合は「聞く」が用いられ、一方、話題内容が主語個人に関わる事柄(主観的な話題)である場合は「言われる」が用いられるとしている。安の研究は日本語の「聞く」と「言われる」の使い分けを分かりやすく論じている点で評価できるが、韓国語との対照が少なく、また上述した許の研究と同様に、同一の場面で両言語にどのような違いが見られるのかについては考察していない。

このような先行研究からの課題を踏まえ、本研究では、話し言葉における同一の場面で日韓両言語の受動文及び受動表現にどのような違いが見られるのかを試みることにし、分析資料としては日本でも人気ドラマであった「冬のソナタ」の対訳本を用いた。対訳本を選んだ理由は、同じ文脈、同じ場面、同じ状況という同一視点から両言語の受動文及び受動表現がどのように使われており、また、どのように異なるのかを対照して見るには非常に良い資料で

あると思ったためである。

「冬のソナタ」の対訳本の 1 話～20 話の中から受動文及び受動表現で表されている用例を取り出し、以下の三つに分けて分析及び対照した。そして、以下は各組み合わせから見られた用例数である。

- ①「韓国語－受動文及び受動表現／日本語－受動文」で表されている用例：28 例
- ②「韓国語－能動文／日本語－受動文」で表されている用例：32 例
- ③「韓国語－受動文／日本語－能動文」で表されている用例：6 例

上記の三つの組み合わせの中、最も多く見られた用例は組み合わせ②の韓国語は能動文で表されているのに対し、日本語は受動文で表されている用例である。組み合わせ①の両言語ともに受動文及び受動表現で表されている用例は 28 例見られたが、受動文で対応している用例はわずか 7 例であり、残りの 21 例は韓国語の受動表現(語彙的ヴォイス)に対応した用例である。この結果から韓国語は「o(i)類接辞」で表す典型的な受動形態の使用が非常に少ないことが分かる。そこで、どのような場合・状況で両言語は構文的な受動文で対応するのかを分析した。これらの用例を分析することで、本研究の中心である組み合わせ②との相違点が明確になり、能動文の使用が多い韓国語がどのような場面・状況で典型的な受動文を用い、日本語の受動文と対応するのか分かると考えられる。次に、本研究の中心である組み合わせ②に関しては中でも韓国語の「言う／話す／聞く(訊く)」といった動詞が、日本語ではほとんど「言われる」という受動文で表されている用例に注目し、なぜ同じ場面・状況なのに異なる文構成になるのかに対する考察をまとめる。また、韓国語の「言う／話す／聞く(訊く)」といった動詞がどのような場合に日本語の「言われる」に対応するのかを調べるため、両言語が能動文の「言う」で対応している用例とも対照かつ考察を行った。これらの用例を考察することで、日本語の「言われる」の使い方に混乱している韓国人日本語学習者により明確な使い分けが提示できると思われる。なお、組み合わせ③については本稿では扱わない。

全ての用例は、尹(1996)の分析方法に準拠し、それぞれ主語、行為者²、行為の対象³、述語、受動の

分類という項目で分析を行った。なお、より明確な対照のため、韓国語の用例にはそれぞれ逐語訳を加えた。そして、分析では「省略」、「なし」という用語を使っているが、「省略」とは文章の中で表れていない語彙のことを示し、この場合は話の流れから推理できる意味的な解釈を括弧の中に付け加えた。「なし」とは一般的な事実や、「行為の対象」のない自動詞的な表現を表す。

日本語を学習している韓国語母語話者が、ある行為や作用を被った際、韓国語では能動文で表す文を、日本語ではどう用いればいいのかを検討することは有効であると考え。そこで、本研究は、ある行為や作用を被ったことを表す韓国語の能動文、受動文及び受動表現が日本語ではどう表れているのかを中心に考察を行った。

以下、本稿で明らかにしたいことをまとめる。

1. どのような同一場合・同一状況で両言語は構文的な受動文で対応するのか。
2. 韓国語の「言う／話す／聞く(訊く)」といった能動文の動詞が、どのような場面・状況で日本語の「言われる」に対応するのか。
3. 韓国語の「言う／話す／聞く(訊く)」といった能動文の動詞が、どのような場面・状況で日本語の「言う」に対応するのか。

4. 分析及び考察

4.1 分析

4.1.1 両言語の受動文の用例分析

「冬のソナタ」の対訳本の 1 話～20 話の中から両言語が受動文及び受動表現で対応して表されている用例は全部で 28 例見られた。以下、それらの中から両言語が構文的な受動文で対応している用例を挙げて分析した。

用例①

【第 7 話】

<韓国語>

채린: 불안해서 그랬어. 민형씨까지 유진이한테
뽐기기 싫어서 불안해서 그랬다구.

不安でそうしたの。ミニョンさんまでユジンに奪われるのが嫌で不安だったからそうしたのよ。

主語：省略(話し手、チェリン)
行為者：유진(ユジン)
行為の対象-対格：미니ョン
与格：なし

述語：훔기다(奪われる)
受動文

<日本語>

チェリン：不安だったのよ。ミニョンさんまでユジンに奪われるんじゃないかと思って。

主語：省略(話し手、チェリン)
行為者：ユジン
行為の対象-対格：미니ョン
与格：なし

述語：奪われる
受動文

韓国語は、受動接尾辞「-기(gi)-」による受動形である。「훔다(奪う)」という他動詞に受動接尾辞「-기(gi)-」が接続し、「훔기다(奪われる)」という受動形で表されている。一方、日本語も「奪う」の受動形である「奪われる」が用いられ、主語や行為者などの全ての文構成が韓国語と一致している。そして、両言語ともに自分の恋人を奪われる、つまり、間接受動の所有物受動になり、受動文で表すことで何らかの被害を被ったという意味を表していると思われる。

用例②

【第14話】

<韓国語>

채린：(진략)너랑 나랑 무슨 죄가 있다고 이렇게
채여야 되니?
あなたと私と何の罪があつてこんなにふられ
なきやいけないの？

主語：너랑 나 (君と私)(サンヒョクとチェリン)
行為者：省略(ユジンとミニョン)
行為の対象-対格：チェリンとサンヒョク
与格：なし

述語：채이다(차이다)(ふられる)
受動文

<日本語>

チェリン：(前略)あなたも私もなんの落ち度があつてふられるわけ？

主語：あなたと私(サンヒョクとチェリン)
行為者：省略(ユジンとミニョン)
行為の対象-対格：チェリンとサンヒョク
与格：なし

述語：ふられる
受動文

韓国語は、受動接尾辞「-이(i)-」による受動形である。「차다(ふる)」という他動詞に「-이(i)-」が接続した形で、「ふられる」という意味になる。この用例も用例①と同様に、両言語ともに受動文で対応しており、受動文を用いることによって何らかの被害を被ったという意味合いが強いと考えられる。

以上、両言語が受動文で対応している用例を見たが、これらの用例が受動文を用いて表されているのはそれぞれの用例に用いられた動詞、「훔다(奪う)」、「차다(ふる)」が持っている性質と関わりがあるように思われる。つまり、そもそもマイナスイメージを持つ動詞に、さらに「被害を与えるという性質」を表すために受動文で表されていると考えられる。これらの用例から両言語が構文的な受動文で対応する場合は、何らかの「被害」を表す意味として用いられる傾向が強いと思われる。

4.1.2 受動文の「言われる」の用例分析

「冬のソナタ」の対訳本の1話～20話の中から「言われる」受動文で表されている用例は全部で15例見られた。以下、全用例の中からいくつか用例を挙げて分析した。

用例③

【第2話】

<韓国語>

유진：(진략)니가 만나자고 해서 좋아했더니..
(중략)
あなたが会おうと言って嬉しかったのに

主語：니(君)、聞き手(ジュンサン)
行為者：니(君)、聞き手(ジュンサン)
行為の対象-対格：なし
与格：ユジン

述語：(말)하다(する)※意味：言う
能動文

<日本語>

ユジン：(前略)会おうって言われて舞い上がったんだから。(中略)

主語：省略(話し手、ユジン)
行為者：省略(聞き手、ジュンサン)
行為の対象—対格：なし
与格：ユジン

述語：言われる
受動文

用例③の韓国語は、主語は、述語である「만나자고 하다(会おうと言う)」と言った者である聞き手の「ジュンサン」である。なお、能動文であるため、行為者も「ジュンサン」になり、その対象は「ユジン」になる。一方、日本語は「あなたが私に会おうと言った」といった韓国語と同様の能動文でも「私はあなたに会おうと言われた」と受動文で表されている。すなわち、同一状況なのに、両言語は異なる視点を持ち、韓国語は行為者中心の能動文、日本語は話し手中心の受動文になっている。

許(2005)では、上記の用例のように、発話内容が直接的に聞き手に向けられ、それによって聞き手が何らかの感情を持つようになったことを表す際、日本語は「言われる」という受動文を用い、動作を受ける客体が動作の影響を受けて何らかの感情の変化をもたらしたことを表す場合が多いと述べられている。

用例④

【第6話】

<韓国語>

민형：그렇겠죠. 이렇게 천사같은 얼굴로 얘기하는데, 누가 일부러 그랬다고 생각하겠어요?

そうですね。こんなに天使みたいな顔で話すのに誰がわざとそうしたと思いますか？

主語：省略(聞き手、ユジン)
行為者：省略(聞き手、ユジン)
行為の対象—対格：なし

与格：みんな

述語：얘기하다(話す)※意味：言われる
能動文

<日本語>

ミニョン：そりゃそうでしょうね。

こんな天使のような顔で言われたら、誰が故意にそう言ったと思いますか。

主語：省略(みんな)
行為者：省略(聞き手、ユジン)
行為の対象—対格：なし
与格：みんな

述語：言われる
受動文

用例④の韓国語は、主語と行為者は省略されているが、述語で「얘기하다(話す)」という動詞が用いられ、「XハYニ～と話す」、つまり、用例③の「(말)하다(言う)」と同一の文構成を持つ。そのため、主語と行為者は聞き手の「ユジン」になる。このような文構成を「ニ」格である「Y」を主語にする構成にすると、「YハXニ～と聞く」になるが、用例④は主語個人に関わる事柄になるため(安 2007)、日本語では「～と言われる」と受動文になったと思われる。なお、次に続く「思う」の主語を統一する必要があることから、構文上の必要性もあったと思われる。

用例⑤

【第6話】

<韓国語>

김반장：(전략)저 조막막한 것들 밑에서 잔소리 들으면서 일해야 한단 말이야? (중략)
あの子たちの下で小言聞きながら働かなきゃいけないのか？

主語：省略(話し手、キム班長)
行為者：省略(話し手、キム班長)
行為の対象—対格：文句
与格：キム班長

述語：듣다(聞く)※意味：言われる
能動文

<日本語>

キム班長：(前略)あんなひよっこどもの下で文句言
われながら働かなきゃなんねえんだ？
(中略)

主語：省略(話し手、キム班長)

行為者：聞き手(ひよっこども)

行為の対象-対格：文句

与格：キム班長

述語：言われる

受動文

用例⑤の韓国語は、主語と行為者が省略されているが、述語である「듣다(聞く、意味：言われる)」という動詞の性質から考えられると、「XハYニ/カラ～を聞く」といった構成をもつ。そのため、主語は話し手の「キム班長」になり、「듣다(聞く)」という行為をしている行為者も話し手の「キム班長」になる。一方、日本語は「文句を言われる」と受動文で表されている。そして、「ひよっこどもは俺(話し手)に文句を言った」という能動文から、主語は話し手の「キム班長」で、行為者は聞き手の「ひよっこども」と考えられる。

用例⑤の日本語の「言われる」は、前述のように話している内容が直接聞き手に向かっている場合であり、文句を「言われた」と表現することによって「迷惑」といったニュアンスで表されている。これに関して安(2007)では、「言われる」は前後の節・文の主語を一致させる場合をも含めて特定の人物からの打ち明け・警告などというような、「言う」では表せない独特のニュアンスが加わって使われるものであるとしている。

4.1.3 能動文の「言う」の用例分析

「冬のソナタ」の対訳本の1話～20話の中から両言語が能動文の「言う」で対応されている用例は全部で33例見られた。以下、全用例の中からいくつか用例を挙げて分析した。

用例⑥

【第3話】

<韓国語>

승룡：오늘 첫눈 온다고 그랬는데...눈이 안오네.

今日初雪降ると言ったけど、雪が降らないね。

主語：첫눈(初雪)

行為者：省略(情報源)

行為の対象-対格：なし

与格：なし

述語：그리다(そうする)※意味：言う

能動文

<日本語>

스니ョン：今日、初雪が降るって言っていたのに
...降らないな。

主語：初雪

行為者：省略(情報源)

行為の対象-対格：なし

与格：なし

述語：言う

能動文

用例⑥の韓国語と日本語は、能動文として対応しているが、「初雪が降る」という第三者、或いはニュースなどから聞いたと情報を「言う」という動詞で表している。つまり、こういう場合は、前述の用例③の「言われる」のように、発話内容が直接的に聞き手に向けられ、それによって聞き手が何らかの感情を持つようになったことを表す場合ではないため、日本語も「言われる」ではなく、「言う」という能動文で対応されていると考えられる。

用例⑦

【第12話】

<韓国語>

직원：아까도 누가 이 학생 기록을 보여달라고 하
더라고요.

さっきも誰かこの学生の記録を見せてくれと
言ったんです。

主語：누가(誰か)

行為者：누가(誰か)

行為の対象-対格：記録

与格：省略(話し手)

述語：하다(する)※意味：言う

能動文

<日本語>

職員：さっきも誰か来て、この学生の記録を見せて

くれと言ったんですよ。

与格：省略(ユジン)

主語：誰か

行為者：誰か

行為の対象－対格：記録

与格：省略(話し手)

述語：言う

能動文

上記の用例も韓国語と日本語は、能動文として対応しているが、用例⑥のように単なる第三者、或いは噂などから聞いたと情報を伝えているわけではない。むしろ、前述の用例③のように、発話内容が直接的に聞き手に向けられており、日本語では「さっきもある人からこの記録を見せてくれと言われたんです」と「言われる」を用いることも可能のように思われる。しかし、用例⑦が用例③と異なるところは、発話内容によって聞き手が何らかの感情を持つようになったことを表す場合ではないため、「言われる」という受動文ではなく、「言う」という能動文で表されていると考えられる。

用例⑧

【第12話】

<韓国語>

유진：상혁이가 물어보더라..이민형씨 어디가 좋았나구.

サンヒョクが訊いてたの。イ・ミニョンさんのどこがよかったのって。

主語：상혁(サンヒョク)

行為者：상혁(サンヒョク)

行為の対象－対格：なし

与格：省略(話し手)

述語：물어보다(訊く・聞く)

能動文

<日本語>

ユジン：サンヒョクが訊いてきたの。イ・ミニョンさんのどこがよかったのかって。。

主語：サンヒョク

行為者：サンヒョク

行為の対象－対格：なし

述語：訊く・聞く

能動文

上記の用例は、両言語とも能動文で文構成も一致している。前述した用例⑤の場合には、同じ「聞く(訊く)」という動詞でも日本語の場合、話している内容が直接聞き手に向かっており、また、特定の人物からの打ち明け・警告などというような、独特のニュアンスの性質を帯びていたため、その話を聞いた聞き手を主語とし、「～と言われる」で表されていた。上記の用例⑧も「サンヒョクから言われた(訊かれた)」と受動文で表すことも可能であろう。しかし、話している内容が直接聞き手に向かってはいるものの、用例⑤のように特定の人物からの打ち明け・警告などというような、独特のニュアンスの性質を帯びていないため、単なる訊かれた話をする場合と判断され、日本語でも能動文で表されていると考えられる。

4.2 考察

上述した用例分析から、まず、両言語が同一場面で構文的な受動文で対応する場合は、前述のようにある文で用いられる動詞の性質との関わりが強いと思われる。そもそもマイナスイメージを持つ動詞に、さらに「被害を与えるという性質」を加える場合には両言語ともに受動文を用い、相手に何らかの被害を被った意味合いを表していると考えられる。しかし、本研究で分析した用例は話し言葉に限られ、さらに直接受動の有情物受動や間接受動の所有物受動に該当する用例がほとんどであった。そのため、書き言葉における両言語の受動文の対応や、無情物受動に関しては更なる研究が必要であろう。

次に、韓国語は能動文、日本語は受動文で対応される場合は、形態的に韓国語の「(말)하다(言う)」、「얘기하다(話す)」、「듣다(聞く)」という動詞は受動形(으)ㄴ(受動接辞)が存在しない。そのため、文脈では「聞く」という動詞が受動的な意味を持ちながら働くことになり、当然能動文で表すしかない。ところが、日本語は「言う」、「話す」、「聞く」という全ての動詞がそれぞれ「言われる」、「話される」、「聞かれる」と受動形が存在する。しかし、実際の用例ではその受動形が存在するものの、ほとんど「言われる」という受動文に対応されていたのである。これは日本語の受動文は構文、つまり、形態的な部分

より、どのような場合に、どのような意味として使われるのが核であることを示していると思われる。そのため、韓国語では「言う／話す／聞く(訊く)」の能動文で表しても話している内容が、直接聞き手に向かっていている場合や、それによって聞き手が何らかの感情を持つようになったことを表す場合、また、その内容が「迷惑」のような独特のニュアンスを帯びている場合には、日本語では視点が変わり、その話の聞き手を主語とし、「～と言われる」で表すと思われる。本研究で取り上げた韓国語の用例では、上述した要素が含まれている状況であるため、日本語では「言われる」という受動文で表されていたと考えられる。要するに、「言われる」という受動文を用いることによって単なる視点の移動だけではなく、動作を受ける客体が動作の影響を受けて何らかの感情の変化をもたらし、そしてその感情の中には被害や迷惑の意味を表す意味的・語用的な特徴が含まれていると思われる。

最後に、両言語ともに能動文で対応していた「言う」の用例は、韓国語の「(말)하다(言う)」、「예기하다(話す)」、「듣다(聞く)」といった動詞が用いられても上述した日本語の「言われる」の特徴を持っていないため、両言語ともに能動文として対応されていると思われる。つまり、「言う」という動詞が第三者、或いは噂から聞いたという意味を持つ単なる「情報伝達」の機能として働く場合、また、発話内容が直接的に聞き手に向けられていてもその内容によって聞き手が何らかの感情を持たない場合には、日本語は「言われる」という受動文にならないため、両言語は「言う」という能動文で対応できると考えられる。

5. 結論

本研究では、「冬のソナタ」の対訳本の1話～20話の中から取り出した韓国語は能動文、日本語は受動文で表された用例のうち、韓国語の「言う／話す／聞く(訊く)」といった動詞が、日本語ではほとんど「言われる」という受動文で表されている用例に注目し、なぜ同じ文脈、同じ場面、同じ状況なのに異なる構文になるのかに関する考察を試みた。その結果をまとめると、以下の三つになると思われる。

1. 日韓両言語が同一場面で受動文で対応する場合は、ある文で用いられる動詞の性質との関

わりが強いと思われる。そもそもマイナスイメージを持つ動詞に、さらに「被害を与えるという性質」を表す場合には両言語ともに受動文で表し、相手に何らかの被害を被った意味合いとして用いられる傾向が強いと思われる。

2. 韓国語の「言う／話す／聞く(訊く)」といった動詞が、話題が直接聞き手に向かっていている場合、それによって聞き手が何らかの感情を持つようになったことを表す場合、また、その内容が「迷惑」のような独特のニュアンスを帯びている場合には、日本語では視点が変わり、その話の聞き手を主語とし、「言われる」と受動文で表すと思われる。
3. 「言う」という動詞が第三者、或いは噂から聞いたという意味を持つ単なる「情報伝達」の機能として働く場合、また、発話内容が直接的に聞き手に向けられていてもその内容によって聞き手が何らかの感情を持たない場合には、日韓両言語は「言う(能動文)－言う(能動文)」で対応する。

6. おわりに

日本語の「言われる」は、談話レベルで最も多く使われる日本語の受動文であり、日本語の受動文を学習する際には欠かせないものであろう。しかし、本研究の分析結果からも窺えるように、日本語の受動文は日本語と韓国語の構文的な対応より、どのような場合に、どのような意味として使われるのが核であるため、多くの韓国人日本語学習者に混乱を招いていると思われる。

最後に、本研究での用例や結果は「冬のソナタ」の対訳本での限られた条件内でのケーススタディであるため、一般化するには少々欠けている部分もあると思われる。今後は日韓の母語話者と韓国語・日本語の学習者らが実際、「言われる」をどのように使い、使用しているのかを調べ、どのように学習すれば有効であるのか、取り組んでいきたい。

注

1. 韓国語では「受動文」より「被動文」と表記することが多い。
2. 本研究での行為者とは、両言語ともに、能動文の場合は行為を行う者を示し、受動文の場合は文章の中で「-に」、「-によって」にマークされ、述語に対して

行為を引き起こしているものを示す。韓国語の受動文の場合は「-에(に)」、「-에게(に、から)」、「-한테(に、から)」、「-에 의해서(によって)」にマークされているものを示す。

3. 「対格」(ヲ格)と「与格」(ニ格)を区別し、両方を取り出す。両方取り出せない場合はどちらか一つにする。

参考文献

- 安善柱(2007)「「聞く」と「言われる」の使い分けに関する考察」『日本学報』第71号, 39-51.
- 安増煥(1999)「被動文變形能力에서 韓國語와 日本語-言語類型設定을 위 接近-」『일본문화학보』7호 한국일본문화학회 51-67.
「被動文變形能力における韓国語と日本語-言語類型設定のための接近-」『日本文化学報』7号 韓国日本文化学会 51-67.
- 池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学-言語と文化のタイポロジーへの試論-』大修館書店
- 尹寶竟(1996)「現代日本語の話しことばにおける非情受動文」『新潟大学 国語国文学会誌 38』1-16.
- 久野暉(1978)『談話の文法』大修館書店
- 国語学会編(1982)『国語学大辞典』東京堂
- 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- 許明子(2004)『日本語と韓国語の受身文の対照研究』ひつじ書房
- 許明子(2005)「「言われる」受身文の使い方について」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第20号, 1-14.
- 서정수(Scojeongsu,1996)『국어문법』한양대학교 출판 『国語文法』漢陽大学出版
- 우인혜(Uinhye,1997)『우리말 피동연구』한국문화사 『ウリマル被動研究』韓国文化社
- 최현배(Choihyenbae,1983)『우리말본』열변제 고침 정음 문화사 『ウリマル本』10回目直し チョウウム文化社

用例引用資料

- 安岡明子訳(2003)『『冬のソナタ』で始める韓国語～シナリオ対訳集～』キネマ旬報社

ちよん じえひ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
jachec6736@yahoo.co.jp

A contrast study in the Japanese-Korean passives — Focusing on the “*iu* / *hanasu* / *kiku*” —

CHUNG Jae Hee

Abstract

This study makes use of the same story written in Japanese and Korean. Regardless of the context, place, and situation, the Korean translation of the story generally uses active voice in its narration while the Japanese version relies heavily on passive voice. Identical passages from both versions were selected, compared and analyzed. Special attention was paid to the verbs ‘*iu*’, ‘*hanasu*’ and ‘*kiku*’. In standard Korean, these three verbs are usually expressed using active voice, but in everyday Japanese they tend to be used passively. This study focuses on the reasons for such differences even where context and message coincide. The results of the current study reveal that the difference in voice is due to the direct object being influenced by the verb itself in Japanese, and where the object is a human being the influence can cause a negative or disadvantageous result.

[Keywords] passives, *iu*, *hanasu*, *kiku*, *iwareru*, point of view

(Graduate School of Humanities and sciences, Ochanomizu University)